



自然遊学館 だより



2007 SPRING

No. 43



■2007.4.6 発行 貝塚市立自然遊学館

■行事レポート

- 春の七草摘みハイキング 1
- 浜辺に打ち上げられた貝拾い 2
- バードウォッチング 3
- 自然遊学館の友達集まれ！ 4

■生きものよみもの

- カマキリタマゴカツオブシムシ
の生活史 2 5

【泉州生きもの歳時記】

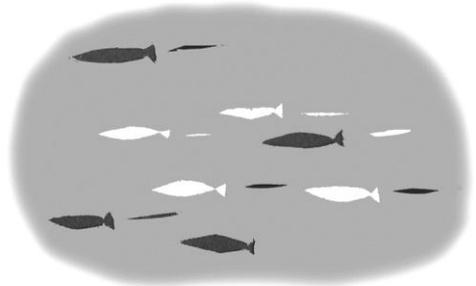
- イノシシ 猪 7

■館長コーナー

- 春 2. 先生の通りに 8

■投稿

- 魚網くず漁り（寺田拓真） 9
- 寄贈標本の紹介 10
- 近木川河口にスナメリ漂着 11
- ごあいさつ 12
- 遊学館スタッフ日誌 12
- おしらせ 13



表紙の魚のイラストは二色小学校4年生（当時）田中貴大さんが3月に作成した切り絵作品を基にしています。

■行事レポート

春の七草摘みハイキング

場所：蕎原ほの字の里

日時：2007年1月6日（土）10:30～13:30

参加者 45名

2、3日前から雨天が予想され、七草粥を人数分準備してもらうことを考えて、雨天でも実施できるように内容を少し変更し、申込者全員に連絡を入れました。

小雨の中、ほの字の里の室内に集合、遅刻組があったり、バスに乗り遅れた家族があったりして、迎えに行くやら、連絡を取るために走り回るやらで、慌ただしかったです。11時前には参加者が全員揃い、ヤレヤレ、ホッ。前日に摘んでおいた七草や、よく似て紛らわしい草の実物を見てもらいながら、七草にまつわる話をしました。

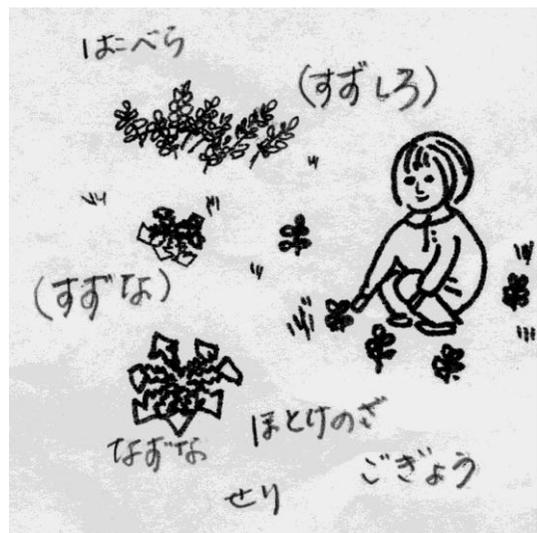
11時半きっかり、ほの字の里の方々が腕に七草粥を入れてくださり、豆っ子クラブ製造の漬け物をつまみながら、賑やかにいただきました。今年の七草粥は、七草を細かく切ることなく、ほぼ全草で入っていて少し土臭い、という感想も聞かれましたが野趣豊かでした。



ゆっくりいただいた後、館が用意したお土産の七草セットを家族毎にお渡しして、ひとまず解散。スタッフと希望者（ほとんど全員）は、ぞろぞろと蕎原の田畑に出かけました。ちょうど雨もやんでいたのので、施設のすぐ下で、ナズナ・セリ・ハハコグサ（ゴギョウ）・ハコベ（ハコベラ）を摘み、少し歩いて田んぼの端っこに群生するコオニタビラコ（ホトケノザ）を加え、皆さんにこにこ顔で帰って行かれました。



（白木 江都子）



浜辺に打ち上げられた貝拾い

場所：近木川河口

日時：2007年2月10日（土）13:00～15:30

参加者 35名

今冬は暖冬の影響か北西風が強く吹く日
があまりなかったようで、現地の下見をした
時、浜辺に打ち上がっている貝や海洋生物
の量は少ないように思えました。当日の
観察会の際にもあまり種類数は、出てこ
ないのではとあまり期待はしていません
でした。

例年同様、講師に大阪湾の貝類相を長年
調査しておられる児嶋格さんをお迎えし、
近木川河口右岸の前浜で打ち上げられた漂
着物拾いを行いました。漂着物は波打ち際
に沿った汀線ていせんとほぼ平行するように浜に帯
状に溜まっています。巻貝や二枚貝の殻な
どは様々な形のものがあり、宝探しをす
るような楽しみがあります。参加者はめい
めい浜にしゃがみこんで、じっくりとお気
に入りの採集物を集めました。



約1時間の採集の後、みんなが採集した
ものを一同に集めて、貝殻の種名などを教
えてもらいました。思いのほか、いろいろ

な種類が集まり、解説するのにだいぶ時間
をとりました。近木川の河口における打ち
上げとして、初記録となるシドロガイやコ
ロモガイ、キセワタガイなどの貝殻も採集
されました。結局、海産の貝殻だけで47種
類になり、昨年の41種類、一昨年の34種
類を上回る種数になりました。その他、目
立った漂着物として、大きなモクズガニの
死体があり、これらは川を下ってきて繁殖
を終え、寿命を迎えた親ガニたちだと考え
られます。



館に戻ってからは、採集物を使って簡単
な工作を行いました。紙皿に採集した貝殻
などを貼り付ける記念品です。自由にくっ
つけてアート風にしたたり、標本らしい配置
に並べた作品などが出来上がりました。



近木川河口右岸前浜に打ち上げられた生物

2007/2/10 自然遊学館観察会 講師：児嶋 格

		和名	
貝類	海産	多板綱	ケハダヒザラガイ科 ヒメケハダヒザラガイ rr
		腹足綱	ユキノカサガイ科 コモレビコガモガイ rr
			ニシキウズ科 コシダカガンガラ c
			インダタミ r
		ウキツボ科 シマハマツボ rr	
		タマキビ科 タマキビ r	
		ソデボラ科 シドロガイ rr	
		カリバガサガイ科 シマメノウフネガイ cc	
		ムカデガイ科 オオヘビガイ r	
		タカラガイ科 ハツユキダカラ rr	
		タマガイ科 ツメタガイ c	
		ハナツメタガイ r	
		アッキガイ科 レイシガイ r	
		イボニシ c	
		アカニシ r	
		フトコロガイ科 ムギガイ r	
		ムシロガイ科 ムシロガイ rr	
		ヨフバイ r	
		アラムシロ c	
		コロモガイ科 コロモガイ rr	
		キセウタガイ科 キセウタガイ rr	
		カラマツガイ科 キクノハナガイ rr	
		カラマツガイ r	
二枚貝綱	フネガイ科	カリガネエガイ r	
		クイチガイサルボウ r	
		サルボウガイ c	
	イガイ科	ムラサキイガイ r	
		コウロエンカワヒバリガイ rr	
		ホトギスガイ cc	
	ハボウキガイ科	タイラギ r	
	イタヤガイ科	イタヤガイ rr	
	ナミマガシワ科	ナミマガシワ cc	
	イタボガキ科	マガキ cc	
	ツキガイ科	イセシラガイ r	
	ザルガイ科	トリガイ r	
	バカガイ科	バカガイ c	
	チドリマスオ科	クチバガイ r	
	ニッコウガイ科	サクラガイ r	
		ヒメシラトリガイ c	
	マテガイ科	マテガイ r	
	フナカタガイ科	ウネナシトマヤガイ rr	
	イワホリガイ科	ウスカラシオツガイ r	
	マルスダレガイ科	オニアサリ r	
		カガミガイ c	
		アサリ cc	
		ウチムラサキ r	
	オオノガイ科	オオノガイ rr	
淡水産	リンゴガイ科	スクミリンゴガイ c	
	カワザンショウガイ科	ウスイロオカチグサ rr	
	モノアラガイ科	ヒメモノアラガイ rr	
陸産	キセルガイ科	ナミコギセル rr	
		ナミギセル c	
節足動物	軟甲綱	イワガニ科	モクスガニ c
			ケフサイノガニ類 r
		ガザミ科	タイワンガザミ rr
	顎脚綱	フジツボ科	サンカクフジツボ rr
棘皮動物	ヒトデ綱	モミジガイ科	トゲモミジガイ rr
環形動物	多毛綱	カンザシゴカイ科	カンザシゴカイ類の棲管 r

凡例：数量 …… cc 多数、c 普通、r 少数、rr ごく少数

バードウォッチング

場所：千石荘、近木川河口

日時：2007年2月25日(日) 10:00~15:30

参加者 37名

暖冬だというのに観察会の前日から急に寒くなりました。当日はどうなるかと心配しましたが風もなく参加者 37名が千石荘に揃いました。

歩き始めてすぐ近くでウグイスの大きな声がしました。ウグイスは、声はすれども姿はなかなか見えない鳥。みんなで探すとオリーブ色のウグイスを発見することができました。

喜んでいると上空にはワシタカの仲間の姿がみえました。ノスリとオオタカが。どちらも青空に飛んでいる姿をじっくり観察できました。翼の長く見えるミサゴも出現してワシタカの仲間が 3 種も確認できました。

それからコモ池へ。池にはカイツブリが 21 羽も浮かんでいました。ジョウビタキのメスが木の枝で尾をふるわせているのがみられたり、オオバンに、バン、カルガモ、マガモ、ついにはクイナまで登場！なかなかみることのできないクイナをみんなでじっくり観察しました。赤いくちばしがとても鮮やかでした。

千石荘の敷地内に入るまでにみんなすっかり満足。でもまだまだ鳥はみられました。野井谷池ではキンクロハジロの黒と白のオスが数羽、休息していました。それを望遠鏡で見た男の子が「牛みたい！」「ペンギンみたい！」と声を上げていました。

カワラヒワの 200 羽以上の群れが電線に

(山田 浩二)

たくさんとまっているのをじっくり見てからみんなで集合。和田さんに今日見られた鳥のとりあわせをしてもらいました。33 種も確認できました。

午後からは自然遊学館の前に集合して近木川河口の鳥を観察しに行きました。干潟にはモヒカンのように頭の中央が黄色いヒドリガモがたくさん。河口で逆立ちしながらアオサを食べていました。ハマシギやシロチドリもでてきて干潟は賑やかでした。

そこから脇浜潮騒橋まで歩いて行って橋の上から上流を見ていると参加者の方が護岸にカワセミがいるのを発見しました！みんながみている前で、水の中に飛び込み魚を捕まえて、コンクリートに魚をたたきつけて弱らせて食べていました。川沿いを歩くと上空をゴイサギが飛んでいたり、またしてもカワセミが現れたりしました。カワセミが下を向いて水面を眺めているのが望遠鏡でほとんどの人がじっくり見られました。とってもラッキーです。最後に和田さんに自然遊学館の中でとりあわせとまとめをもらいました。



今回の観察会では、千石荘で 34 種、近木川河口で 24 種もの鳥を観察することができました。山の鳥も、海の鳥も、じっくり満喫できました。大阪市立自然史博物館の和田岳氏、下見をしてくださった食野俊男氏、石井葉子氏、参加者の皆さん、ありがとうございました。

(宮本 久美子)

自然遊学館の友だち集まれ！

場所：自然遊学館、市民の森

日時：2007 年 3 月 25 日（日）13:00～16:00

参加者 14 名

暖かい冬につづき、突然の寒い春。風邪の流行もあり参加者は少なめでした。

まずは、ビッグカードを使っての神経衰弱ゲームをしました。絵柄は動植物です。次は今年一年間の活動発表をしました。月夕ちゃんは、夏休みの生きもの観察を、写真や絵を組み合みあわせた図にしあげ、発表しました。大地くんは琵琶湖の鳥のことを、作文や絵で発表しました（絵は 13 ページ）。悠香ちゃんはヨシノボリの不思議を絵や文章にまとめました。京加ちゃんは海の生きもの、特にカニが大好きなので、切り絵にして発表しました。

最後は遊学館周辺で、宝探しをしました。今年度最後の行事でした。来年度も色々企画しています。たくさんの方の参加を待っています。

(湯浅 幸子)

■生きものよみもの

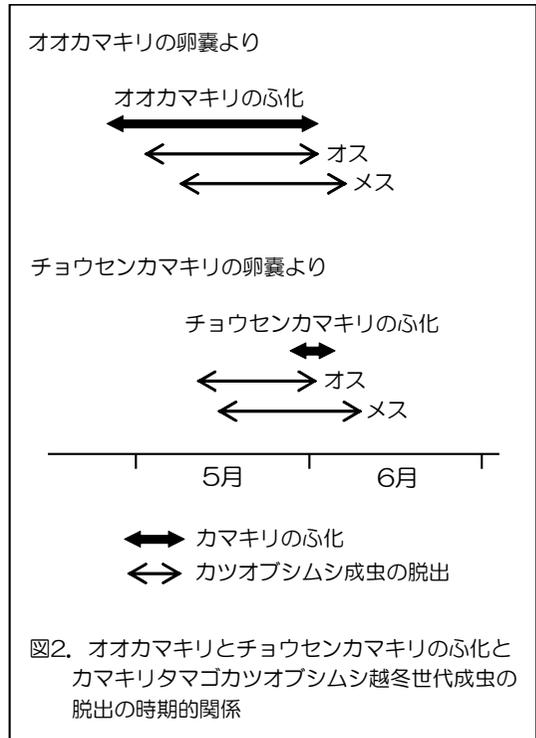
カマキリタマゴカツオブシムシ の生活史 2

前号では、本種の越冬世代がオオカマキリとチョウセンカマキリの越冬卵囊から脱出する割合、および卵囊あたりの脱出個体数を紹介しました。

今回はまず、越冬世代の成虫が脱出する時期と生存期間を、1991年に行った飼育結果(岩崎ほか、1994)をもとに紹介します。これらの飼育は大阪府立大学実験圃場(堺市)にある昆虫飼育室の準自然条件下で行われたもので、用いた卵囊は前号の表1、3に示した光明池(オオカマキリ卵囊77個)と野々井(チョウセンカマキリ卵囊38個)で採集したものです。

カマキリのふ化に関しては、オオカマキリが4月25日～6月1日にかけてだったのに対して、チョウセンカマキリは5月26日～6月5日と時期がそろっていました(図2)。オオカマキリ卵囊(9個)からは、カツオブシムシの雄成虫(119個体)が5月1日～6月3日、雌成虫(119個体)が5月7日～6月7日の間に脱出したのに対して、チョウセンカマキリ卵囊(4個)からは雄(68個体)が5月12日～6月3日、雌(66個体)が5月14日～6月10日の間に脱出しました。両種の卵囊において雄の方が早く脱出し、雌雄ともふ化時期の早いオオカマキリ卵囊から早く脱出しました(いずれも、t検定により $P < 0.01$)。カマキリのふ化とカツオブシムシの脱出に関しては、チョウセンカ

マキリのふ化のみが非常にそろって行われるという特徴がみられました(図2)。



次に、越冬世代成虫の寿命を調べるために、1991年の春に羽化した成虫を、各卵囊から脱出した雌雄を一まとめにして200mlの透明プラスチックカップに入れ、準自然条件下で約10%のハチミツ水溶液をしみ込ませた脱脂綿を与えて飼育しました。雌成虫は、カップの内面に産卵したので、その数を毎日数えました。平均寿命はオスが53.3日(100個体)、メスが61.5日(106個体)で、最も遅い時期まで生存していたのは、雄が8月26日まで、雌が8月24日まででした。産卵は飼育開始の2週間後から8月17日まで観察され、1雌当たりの産卵数は9.7個でした。

大阪府では、オオカマキリやチョウセンカマキリの卵嚢が産まれ始めるのが、少なくとも 9 月に入ってからなので、野外で春に羽化した越冬世代成虫が秋まで生存するという年 1 化の生活史を送る可能性は低いと考えられました。もちろん、野外ではハチミツ水溶液よりも生存に適した餌を摂食して寿命が飼育下より長いという可能性もあります。また、1992 年に行った 20℃でハチミツ水溶液を与えた飼育では、雌成虫は平均で約 4 ヶ月生存し、これは夏を過ごすのに十分な寿命の長さでした（百々康行、未発表データより）。

野外では、このカツオブシムシは夏をどのように過ごしているのでしょうか？（図 3）。春に羽化した成虫が夏を涼しい場所で過ごす、あるいはハチミツ水溶液よりもいい餌を食べて過ごすという年 1 化の生活史を送っているのか、あるいは第 1 世代（＝越冬世代の子世代）の幼虫がカマキリの卵嚢以外の餌で発育して、年 2 化の生活史を送っているのでしょうか？

これまでの研究では、石井五郎（1937）が、前年に産卵されたオオカマキリ卵嚢を乾燥固死させたものを越冬世代成虫に与えて産卵させ、ふ化した第 1 世代幼虫をその餌で飼育し、秋に成虫を得ることができたと報告しています。また、熊代三郎（1938）は、クロバエ、ハチミツガ、アブラゼミの乾燥標本、およびチョウセンカマキリのふ化後卵嚢で、第 1 世代幼虫を飼育できたと報告しています。年 2 化の生活史の方が可能性は高いようです。

今から思えば、この熊代の論文が「ふ化後卵嚢」だけを扱っていたら、もっと簡単に野外での夏の生活史を明らかに出来ていたと思います。私たちは、熊代の論文に答えが隠されているとは知らずに、夏の幼虫の餌はもしかしたらハチの巣ではないだろうかなどと考え、その採集をするといった試行錯誤の時期が続きました。（つづく）

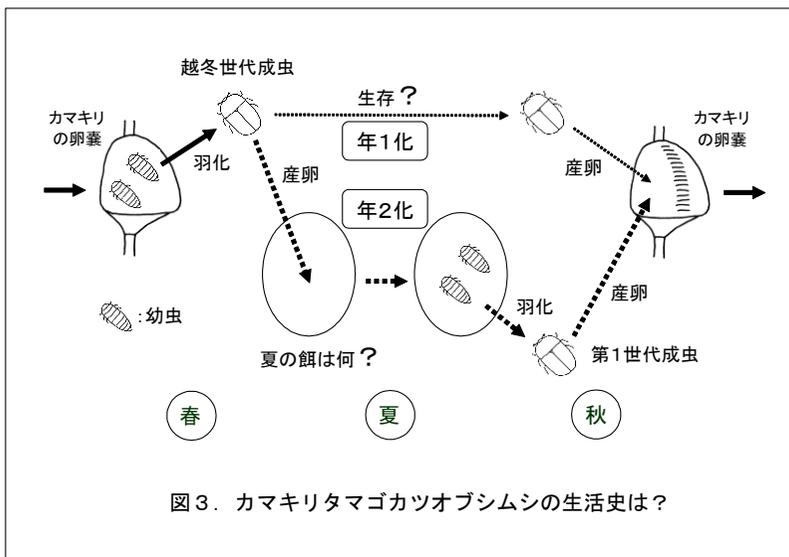


図 3. カマキリタマゴカツオブシムシの生活史は？

引用文献

石井五郎（1937）蚕糸試験場報告 9：151-165.
 岩崎ほか（1994）応動昆虫 38：147-151.
 熊代三郎（1938）応用動物学雑誌 10：254-256.

（岩崎 拓・青柳 正人）

【泉州生きもの歳時記】

イノシシ 猪

3月10日、「たわわの小池」にレンコンを植えよう！ という行事の準備中に館から電話が入りました。柵谷の中辻忠弘さんから「イノシシを捕獲したけれど、必要ですか」と問い合わせがあり、急いで連絡がほしい、というのです。イノシシは、館の冷凍庫に入るような大きさではないし、いつも剥製づくりをお願いしている西尾製作所は、土日休みです。ほ乳類担当西澤さんと電話でやりとりし「とにかくいただきたい」と返事しました。中辻忠弘さんと柵谷の現場に向かうとき、「昨日、イノシシの気配があったので、餌を工夫して檻をしかけたら、今朝檻に入っていた」と伺いました。冬のイノシシは、食用として最高に美味しいと聞いているのに、それを自然遊学館に譲ってくださるなんて、本当にありがたいことだと思っています。

現場では、貝塚猟友会の根川清志会長、久保川博福会長、窪利栄彦さんが待ちくたびれておられました。檻の中には、脱出しようと激しくもがいたらしく、鼻から血を出してにらんでいる中ぐらいの♀イノシシがいました。「剥製にさせていただきたい」と申し出ると、快く承知してくださり、鉄砲を使うといい剥製ができないからと、槍を使われました。近くを流れる川でイノシシの体を洗い、ブルーシートにくるんで、再び中辻さんの車に載せていただきました。



柵谷で仕留められたイノシシの雌

館に戻り、保田顧問と川村館長と居合わせたジュニア学芸員の矢崎さんにも手伝ってもらって梱包し終え、運送会社まで運びました。引きずるようにしてカウンターまで運びましたが「1.2mを超える大きい荷物はクール宅急便で運べません」と言われてしまいました。

館へ引き返したものの途方に暮れ、休みの西尾製作所へ電話を入れてみましたら、幸運にも年度末の仕事が混んでいて皆さん出勤しておられたのです。山田さんと白木が、イノシシを積んで名神京都東へ向かい、午後4時過ぎ西尾製作所にたどり着きました。

イノシシの体長：約 95cm 体重：約 30kg でした。

後日、解体した食用肉を冷凍して送っていただきました。

イノシシの剥製ができるまでには、4ヶ月間ぐらいかかるそうです。

(白木 江都子)

■館長コーナー

春2. 先生の通りに

現在、少しは時間的なゆとりのできた私は、作物をたくさん作っています。その場所は周りが山に囲まれた栽培にかなり不向きな所です。冬になりますと、日照がほとんどなく、真ん中の部分が4,5時間あたる程度で、全く日のあたらないところもあるのです。それだけに、温度もかなり低く作物の成長がかなり遅れます。また、夏は夏のため池が壊れてしまっているのも水不足に悩まされます。

作物はもちろん有機・極低農薬です。そう表現しますと、いい作物のように聞こえます。実際いい作物なんです。なぜなら、自然の力と私の努力と作物自身の頑張りでできた作品だからです。しかし、一番大事なことを表現していません。作物にとって一番大切なものは水なのです。ところが、有機・無農薬は叫ばれても、水については全く俎上に上りません。たいていの作物はその95%は水です。その水が問題にならないのは不思議でなりません。私たちの作物はこの地上に降った雨水を最初に利用しているのです。

自然一杯な所ですから、害虫やそれらが運んでくる病害にも悩まされますし、タヌキ、アライグマ、ウサギ、イノシシ、カラスなどにも徹底的にいじめられます。それでも頑張っているのは、いい水を利用しているのだという自慢があるからです。

手が切れてしまうほど冷たいときに大根、白菜などの冬野菜を収穫します。1月の始め

の頃にはあぜ道(草も刈らないところは林風になっています)をびよんびよんと1mか1.5m位の距離で跳ぶ鳥がいます。ウグイスです。ウグイスの通り道に入って手を出しますと手のひらにとまります。しかし、1月も半ばを過ぎますと、そのウグイスは地上3mくらいの所を飛び始めるのです。

1月の終わり頃は木から木へと大きく飛ぶようになります。そして、2月の初めには初鳴きします。「ホッケ キキョ、キー」です。それが1週間ほどしますと「ホーホケキキョ」(ホーホケキョの間違いではありません)となるのです。何10年もそうでした。ところが昨年から、まったく違う囀りに変わったのです。音の「聞きなし」は大変個人差があります。私にはどう考えても、「ディーマッチ ビトン」としか聞こえないのです。こんな表現をしますとウグイスと違うと判断されそうですが、それがそうとしかいえないのですから不思議です。

4月にもなりますと、夏の作物を作らなければなりません。毎日ほど3kmはなれた畑に軽トラックで出かけます。4月始めの午前5時半にはもうウグイスは囀りしています。「ディーマッチ ビトン」と。

勤めが休みの日など昼近くまで畑にいます。その間、どれだけそのディーマッチ ビトンを聞くことでしょうか。4月の終わりにはホトトギスが参加します。このホトトギスは標準語ですから特に記すものではありません。「トーキョ トッキョ キョカキョク」の間に「ディーマッチ ビトン」が3,4回入ります。こうして私たちのおいしい作物ができるにはウグイスの囀りも一役買っているのです。ウグイスの鳴き声はその谷に

いる「先生」格に教えられると聞いています。もし、そうなら、なんと(「へたくそ」とは言いませんが)個性的な先生なのではないでしょうか。

(上の囀りのほか「ククククク カックケキ ケッキョケツ」、「ホー ビチャン」があります)

(川村 甚吉)

■ 投稿

漁網くず漁り^{あさ}

3月3日に和歌山県の南部堺漁港に行ってきました。朝早くに貝塚を出発して漁港には7時ごろに着きました。それからすぐにイセエビの刺し網漁の漁網くずを漁ってみました。はじめはなかなか状態のいい生きものを見つけることができませんでしたが、一時間ほどたつと持ってきたバケツには普段目にする事の無いような生きものたちでいっぱいになっていました。

巻き貝の仲間では20cmを超えるような大きなオオナルトボラやボウシュウボラ、突起がたくさんついたオニサザエやセンジュガイの仲間、他にもカタベガイ、ギンタカハマ、ウニレイシが採れました。二枚貝の仲間では、長い突起がたくさんついた橙色で12,3cmくらいの大きさのショウジョウガイや一見筒のようで二枚貝とは思えないようなツツガキが採れました。カニの仲間では、アカゲカムリ、オオケブカガニ、毒を持つスベスベマンジュウガニ、スポン

ジのような原始的な動物であるカイメンを甲羅に背負うオオカイメンガニ、珊瑚の死骸や小石、貝殻、海藻などいろいろなものを甲羅や足に背負うモクズシヨイが採れました。これらのカニは現在、自然遊学館の展示水槽で飼育しています。魚の仲間では、体長の半分くらいの口吻をもつアカヤガラ、ハリセンボン、ウミスズメ、ウツボの骨を採集しました。他にもキサソゴ等の珊瑚類、ネジレカラマツというねじれた針金にしか見えない珊瑚の仲間を採集しました。採集はしませんでした。漁網くずのなかにはサカタザメ、アカエイ、ドチザメ、アオウミガメなども入っていました。漁港内のせり市場では、たくさんのイセエビ、セミエビ、太刀魚、アンコウ、ブリ、鯛、ヒラメ、大きなウツボ、アオリイカが並べられていました。

漁港から帰って自然遊学館でアカヤガラの骨格標本を作りました。下の写真がその標本を作製している様子です。



この春から僕は、東京に引越します。東京湾でもどんな生きものが生息しているかを探っていこうと思っています。

(東京大学理科Ⅱ類1回生 寺田 拓真)

■寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2007年3月分まで)

<哺乳類>

◆大西悠介さんより

タヌキの右下顎骨 1点

貝塚市市民の森 2007年1月14日採集

◆中辻忠弘、根川清志さんら4名より

イノシシ♀ 1点

貝塚市梶谷 2007年3月10日採集

<鳥類>

◆岩崎新、藪根茂樹さんより

メジロ 1点

貝塚市二色3丁目 2007年1月18日採集

◆食野俊男さんより

スズメ 1点

貝塚市脇浜 2007年3月12日採集

<爬虫類>

◆前川大地さんより

ニホンヤモリ 生体1点

貝塚市立二色小学校グラウンド

2007年2月7日採集

◆川口博さんより

ミシシッピーアカミミガメ 1点

近木川河口 2007年3月18日採集

<甲殻類>

◆岸和田漁協さんより

ヘイケガニ 生体5点

テナガコブシ 生体1点

ナナトゲコブシ 生体2点

テナガテッポウエビ 生体2点

オニテッポウエビ 生体1点

阪南2区埋立て地沖1km

2007年2月30日採集

<軟体動物>

◆鈴子差幸さんより

オキナガイ 1点

男里川河口左岸 2004年10月25日採集

海産貝類5種

岬町長崎海岸 2006年8月24日採集

<昆虫>

◆江本大地・玲子さんより

ヤマガタトビイロトビケラ成虫1点

和泉葛城山山頂 2006年11月12日採集

(青柳正人氏に同定依頼)

◆五藤武史さんより

ウスタビガ繭1点

貝塚市蕎原 2007年1月12日採集

オオカマキリ卵囊1点

貝塚市二色 2007年3月29日採集

ツマグロオオヨコバイ成虫1点

貝塚市蕎原 2007年3月31日採集

◆川口博さんより

キアシナガバチ巣1点

和歌山県有田市産 2007年2月11日採集

◆浅井真紀子・いずみさんより

サツマゴキブリ成虫1点

長崎県西海市 2007年3月11日採集

<海岸動物>

◆児嶋格さんより

カイメンの一種 1点

泉南市男里川河口 (打ち上げ)

2007年2月8日採集

近木川河口にスナメリ漂着（速報）



スナメリの体長を測定。左が堂福聖太さん、中央が貝錦四郎さん、右が山本裕允さん¹⁾

3月4日の昼過ぎ、「めちゃくちゃ大きな魚が近木川の河口に打ち上がってる」と、貝塚市立第五中学校1年の堂福聖太さんと山本裕允さんが館へ報告に来てくれました。「ボラとちがうの？」と聞くと、「ボラではない」という返事。

2人に案内されて河口の右岸に行くと、波打ち際に巨大なイカのような死体が浮いていました。しかし、頭蓋骨と歯を見ると哺乳類のように見え、スタッフの西澤真樹子に携帯電話で尋ねると、「イルカの仲間のスナメリだろう」ということ²⁾。尾ひれが欠けていたため、イカのように見えたのでした。

館へ戻り、スコップ、胴長、ビニール手袋、大型のトレイなどを持って再び現場へ。浜から離れた場所まで引き上げるつもりが、水分を含んでやたらと重く、少し動かしただけでそれは無理だと判明。必死の思いで（紙面で臭いをお届けできないのが残念です）少しだけ陸側へ引き上げ、体長を測定しました（上の写真：体長約1m90cm）。

解剖は後日、専門家に任せることにして、アサリ採りに来ていた貝塚市立北小学校4年の貝錦四郎さんにも手伝ってもらい、砂浜に穴を掘り、スナメリの死体を埋めました。このスナメリ漂着のニュースは、3月6日付の産経新聞と読売新聞に掲載されたので、すでにご存知の方もおられるかと思います。

3月8日に、大阪市立自然史博物館の樽野博幸さんをリーダーとする「解体チーム」が集まり、スナメリの死体を掘り返して、展示用の骨格標本を作るために解体処理されました。スナメリの生態や解剖の結果については、解体チームのメンバーが次号で詳しく紹介します。

1) 写真は、3月6日付の産経新聞に掲載されたものと同じです。

2) スナメリの同定は、大阪府立水産試験場の鍋島靖信氏に確認していただきました。

（スナメリ 埋人）

■ごあいさつ

私はこの4月から徳島県立博物館の学芸員として働くことになりました。

今からちょうど6年前、自然遊学館での勤務の話を受け、元々こういった仕事に興味を持っていたこともあって喜んで引き受けさせて頂きました。とはいっても、一体どんな仕事をしたらよいのか、具体的な内容がわからないまま勤務がスタートしました。色々な仕事をさせて頂きましたが、やはり力を入れたのは魚類を始めとする生き物の管理です。遊学館には多くの水槽があり、そこには泉州地方の多種多様な生きものたちが飼育されています。来館されるお客さまたちに、生きものたちの素晴らしい世界を眺めてもらいたく、また水槽を見て再び足を運びたいようなものを目指してやってきました。水族館ほどの規模ではないですが、私は皆さんに遊学館を身近な博物館として捉えて頂きたく、展示という方向からアピールしてきたつもりです。

この6年間でさまざまな人たちに出会いました。学校が終わって駆け付けてくれる子どもたち。行事では強力なサポートを下さるわくわくクラブを始めとする皆さま方。何よりも、大いなる慈愛でもって愚鈍な私を暖かく見守って下さった遊学館の皆さま。そんな雰囲気にも囲まれつつ、気付いたらこの遊学館が大好きになっていました。

幸いにもこれから学芸員として働くことができます。遊学館で学んだ全ての事を発揮することができます。芥にも等しい私が今あるのはこの6年間での財産、すなわち

「さまざまな人との縁」は、元をただせば「遊学館との縁」ではないだろうかと思ひながら思います。6年間本当にお世話になりました。阿波の国にいらした際には、是非徳島県立博物館へお越し下さい。



(山田 量崇)

■遊学館スタッフ日誌

3月4日、岸和田を会場に「第3回ほっといたらあかんやん！大阪湾フォーラム」で大阪湾の環境や生物について話し合いが行われているちょうど最中でした。「二色浜でイルカが漂着!？」との館からの連絡が飛び込んできました。おそらくスナメリだろうと早速、大阪府立水産試験場の鍋島さんと見に行きましたが、現場は潮が満ちてきており、モノが埋められた場所はあえなく海水面の下。再び、6日の干潮時に現場の確認に行くと、大時化のせいか埋めた場所に目印の杭もモノも見当たりません。しまった、モノも波で沖に流されたかなと心配しながら、周辺を棒で地面をつつきながら探索したところ、5m程離れたテトラポッドの横で何やらブヨブヨとした感触に当たりました。軽く掘ってみると、らしき表皮が...ほっと胸をなでおろした次第です。(山田 浩二)



■おしらせ

夏期特別展は「貝塚の野鳥」！

—身近な鳥たちの情報をお寄せ下さい—

大空、街中、干潟、ため池、田んぼに森…。ふと見渡すと、そこにはいつも鳥たちの姿があります。自然遊学館の3年間の調査によって、貝塚市では178種の野鳥が確認されました。今回の展示会は剥製や古巣、卵、生態写真をふんだんに使って、鳥たちのふしぎで魅力的な生態にせまる当館初の野鳥展です。

展示会に向けて、自然遊学館では貝塚の野鳥生息情報を募集しています。写真や繁殖記録など有力な情報をお持ちの方はメール、ファックス、葉書で、または来館された際に直接スタッフまでお知らせ下さい。



自然遊学館わくわくクラブ
江本大地君の作品「オオワシ」



自然遊学館だより 2007 春号 (No. 43)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/index.htm>

発行日 2007. 4. 6

この小冊子は庁内印刷で作成しています。